

メキシコ熱帯雨林の先住民による資源管理

①メキシコ熱帯雨林の土地利用

メキシコは温帯、サバナ、熱帯雨林などさまざまな気候帯を有するが、東南部に広がる熱帯雨林において、先住民は森林と農地を組み合わせた生産活動を行っている。この先住民の農地として、次の3つが重要である。

・ミルパ Milpa

主食であるトウモロコシの畑はミルパと呼ばれる。トウモロコシ栽培は、中央アメリカにおける文明の基礎になったとされており、メキシコ農民のカロリーやタンパク質の摂取において最も重要な作物といえる。場合により穀類やマメ類も栽培される。

・プランテーション

換金作物が栽培される。主な栽培品目はタバコ、サトウキビ、ココヤシ、バナナ、カンキツ類、パイナップル、ゴマ、コショウ、ゴムなどである。

・ポトレロス Potrerros

ウシの放牧地であるが、完全な草地ではなく、マメ科の樹木などが生育しており、それらもウシに採食される。ウシは肉も乳も利用される。ウシを屠殺して肉を取り新しいウシを導入することが頻繁に行われている。

これら3つの土地利用に加えて、二次林（伐採と再生、成熟（60年生）をくり返している森林）からさまざまな資源を得ており、また、バニラ（つる性の着生ランで、果実が香料となる）を栽培する森林もある。さらに、家の周辺にはホームガーデンを持ち、食用、薬用、燃料用などのさまざまな植物を得ている。

これらの土地利用の中で、トウモロコシ等の基本的な食料や生活素材を自分たちで作る自給的生産と、換金作物の生産がともに行われている。自家消費用には、ミルパでの生産物を中心に、二次林やホームガーデンからの生産物も利用されている。換金用には、プランテーションでの生産物を中心に、ポトレロスやバニラの森林からの生産物が充てられる。長期的には、ミルパやポトレロスが放置されて二次林になる場合もあり、二次林は成熟林に移行する。

②持続可能な資源管理

先住民の資源管理において、生存を保障してリスクを最小にするために、多様性と選択肢を最大化することが重要であると指摘されている。すなわち、空間利用や労力の投入の方法、栽培植物や飼育動物をできるだけ多様化することが、リスクの低減につながる。こうした土地利用は、複合的利用戦略 *multiple-use strategy* に則っていると見える。

ベラクルス州に暮らすトトナック族の農家の場合には、1家族当たり平均8 haの土地に対して、年間あたり延べ400日間の労働を投入し、食料と燃料は自給し、これに加えて約8,000米ドルの現金収入を得ているという。

持続可能性の特徴は、a) 高い生物多様性が維持されていること、b) 市場や環境の変化に対応する弾力性を備えていること、c) 長期的な永続性といった点からなるが、このトトナック族の農業は、こうした条件をよく満たしているという。生物多様性の高い熱帯雨林の特性をうまく活用し、合理性を備えたメキシコ先住民農業に農業生態学的な支援が

加れば、生態系に適応した混作・複合農業を維持し、先住民コミュニティの活力を高めることが可能となるかもしれない。

参考文献

Toledo Victor M., Benjamín Ortiz-Espejel, Leni Cortés, Patricia Moguel, and María de Jesús Ordoñez, 2003. The Multiple Use of Tropical Forests by Indigenous Peoples in Mexico: a Case of Adaptive Management. *Conservation Ecology* 7(3): 9. [online] URL: <http://www.consecol.org/vol7/iss3/art9>